

「皆さん、色々お世話になりました……。」

ああ、きょうも又一人減った。もともとから数少ない私達の学校で、毎日のように送別会が開かれた。涙を流して私達に別れを告げる人達は皆、集中豪雨で家を流されたり、危険な状態にある人達だった。

あの悲しかった時から二年余り。けれどもあの時の悲しさ、恐ろしさは、忘れることのできない思い出となってしまった。

昭和三十六年六月二十七日、強風、大雨のため、授業は半日で、皆集団下校した。町に出る二本の道さえも、山くずれや、堤防が切れて、交通が防げられ、バスも通らなくなってしまう。学校の近くにある私の家でさえ、歩いて帰るのがやっとだった。

帰ると家中で相談していた。もし、水が来たらどうしようということだった。その夜は普通どおり九時頃に床に着いたものの、なかなかねむれなかった。十時少しすぎ頃だったろうか。

「S、起きろ！」

という姉の声で目がさめた。さっきまで降っていた雨も、もうすっかりやんでしまっていた。起きてみると、家には、おばあちゃんと、姉と、私、そして、何も知らないでぐっすりとねむっている妹だけだった。父も母も川の線が変わったと言って、どこかへ行ってしまったようだった。有線は、

「早く避難して下さい。早く避難して下さい。」

とアナウンサーも大あわて。火の見やぐらでは、ジャンジャン鐘をたたいて水が来るのを知らせていた。なにがなんだかわからないまま、二階や高い所に色々の物を運び上げた。からだはガタガタ震えだした。時間がたつにつれて

「おーい、おーい」

という声や、

「水が来るぞ。」

という消防団や村の人達の声で、昼間より騒しかった。家の中はまるでがらんとしていた。いつもとは変わった空気が流れていた。

どの位時間がたったのだろうか。やんだと思った雨も又前みたいに降りはじめ、震えはいっそう増してきた。相変らず有線と鐘はなりどうし。二階の窓から顔を出して、外の様子を見てみると、母が走りながら、大声でさげんだ。

「水が来たぞ。早く逃げろ。早く逃げろ。」って。

何度も何度も、繰返してさげんでいた。頭の毛は雨にぬれて、ぺちゃんこくっついていて、顔もどこにあるのかわからないようだった。あわてて小高い所に登って見たものの、なんだか落ち着いていられず、震えながら、少しさがって見た。と同時に、「ドォー」っと大きな音をたてて、水が川のように家の方に進んできた。この時の恐ろしかった事。もうだめだと思っただけくらい。

「水が来たあ。」とさげんで二階にいる祖母に知らせた。

父と母は水を止めに行っていない。あの時、私はどんな事を考えていたのだから

うか。なにしろもう、何かに夢中で、いや何も考えていなかったのかもかもしれない。二階から、今できたばかりの川を見ていると、母が来て、

「へえ（もう）水は来んぞ。」といった。

一時は安心したものの、姉と下へおりていって川を渡ろうとした所へ又、「ドウー」と水がおしよせてきた。さいわい姉が手を引っぱっていてくれたおかげで、流されなくてすんだが、はいていたぞうりを、どこかで流してしまった。あわてて玄関にはいってはみたものの、玄関の中は、水だか泥だかわからないようなものが十五センチ位たまっていた。こんなことが何度か続いて、ようやく大通りに出たものの、大通りは、もはや通りではなかった。大川といってもよい位の水がどうどうと流れていた。まだ夜明け前の、薄暗い中を人々は手に手に、懐中電燈を持って、ぼうぜんとその川を見おろすだけだった。私だってもう何も言えないで、障子戸やこたつやぐらの流れてくる川を、母にしがみついて見ていた。相変らず震えは止まらない。

ようやく夜が明けるころには、あたりは静まりかえり、昨夜あんなに恐ろしい事があったとは思えなかった。学校も休みとなり、私たちは家々の、片づけの手伝いをした。もうだいじょうぶという人々の声を、信じられなかったけれども、信じて、高い所から、荷物をおろしたり、家の中や、庭の土を除いたりした。一睡もしなかったが、疲れはいっこうに出ず、片づけに励んでいた。朝も昼もない。御飯だつて食べたかどうかわからない。二十八日の昼近く、まだ片づけは終わっていなかった。少し小雨模様で荷物も少しづつぬれていた。時間がたつにつれ、村々が騒がしくなり、最後には又、鐘をたたいたり、有線が鳴りひびくようになってしまった。せっかく下におろした荷物をまた上にあげた。昨晚の恐ろしさは、部落の人たちは皆経験したらしかった。それより、経験せざるをえなかった。二日ばかりの間に、二度も三度も荷物の上げ下げを繰返していた。それといつしよに、

「もうだいじょうぶだ。」

という声が信じられなくなってしまった。

それから何日かたった日、どこの部落も町との交通が大水で妨げられてしまったので、ヘリコプターで町から米などを運び配るようになった。私達の部落は、まだ残っていた堤防に、ヘリコプターが米や、衣類や、毛布などを置いていってくれた。しかし、遠方の部落は谷あいや、ヘリコプターが、おりるような広い場所はないので、直接ヘリコプターから、下で待っている人達に、色々の物をおろしてやったそうだ。ヘリコプターの何日かの活動で、かり橋もでき、ようやく車も動き始めてきたものの、部落で一番被害の大きかった場所を見に行くと、向い側に、橋を失って、四方八方どこにも行く場所がなく、家を流してしまい、荷物は何も持ち出せなかった一家がいた。ちょうど私達が行くと、消防団の人達が、むすびを投げてやっている所だった。その姿を見たら、涙が出そうなの、そして、水というものが憎らしい感じだった。初めて知らない土地へ来たような、夢にも思っていないかった、すさまじいまわりのありさま、水だか泥だかわからないような川、山という山は、青い所はほとんどな

く、皆土色に。泥や石や砂が二階にまでたつするようにはいっばいはいつて、家だかなんだかわからない家もいくつもあった。こんな姿を見て、

「ああよかった。自分の家はこんなでなくて。」

という気持がほんとうだった。がその反面、これらの人達は、今後どのようなように暮していくのだろうかという心配もあった。

あの時から二年余り。今までに、あの時の事を忘れた人がいるだろうか。校庭でボールと精いっぱい遊んでいる、いくつものかたまり。教室では、先生とにらめっこして勉強に励んだり、色々の面で中学生として一生懸命やっている私達だ。

あの時、物一つもち出せなくて、家ごと大水にさらわれてしまった大勢の人達、その人達だともうすっかり立ち直り、私と同じように、広い世の中へ飛び立とうとしているのだ。

今、中学校は統合され、隣りの村まで、バス通学している。朝六時頃おきて、停留所まで二時間近く歩いて、バスに乗って通学している人達もある。

この村の中学生は、何に対しても負けない心を持っているのだろうか。そして、広い世界へ飛び立っていくために、今、一生懸命、色々の訓練をしているのだ。努力すれば何でもできるのだ。集中豪雨の時だって一人も犠牲者がなくてすんだのも、ふだんの行いがよかったからかもしれない。

校庭で村の美しい空気を胸いっぱいすって、大きな希望をもって、広い世界に飛び立っていききたい。

(三十八年)